

# 甦る編集者エミリー・ディキンソン ファシクル6

中 井 紀 明

キーワード：復活，秋，墓，自然の再生，天国

詩人エミリー・ディキンソン（1830 - 86）は生前ほとんど無名で、死後1800篇近い詩が親族によって発見された。これらの中に40のファシクル（「束」、「詩集」の意味）と後に言われる形のものが残されている。私は今までファシクルを1から順番に取り上げて詩人自身の編集の跡を辿ってきた。本稿では6番目のファシクルにも詩人自身の「編集」の跡が見られるか検討を加える。短い抒情詩を連ねることで個の詩を超えるより大きな物語を展開しようとしていることを示したい。

本稿ではファシクル6自体をフランクリン版（Franklin, R.W.ed., *The Poems of Emily Dickinson*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1998）に点在している詩群を長々と集約していくが、これはファシクル1から40に所属する詩群をすべて一箇所に集約し活字化した『エミリー・ディキンソン詩集』が英語にもないからである。たとえば本稿のファシクル6だけを絶海の孤島にもって行きひたすらそれを詩集として楽しむということではできないようになっている。ジョンソン版（Johnson, Thomas H.ed., *The Poems of Emily Dickinson*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1955）もフランクリン版もディキンソンの意図した文脈でディキンソンの詩群を提供しているわけではない。写真版で原稿そのものを提供しているもの（Franklin, R.W.ed., *The*

*Manuscript Books of Emily Dickinson*, Cambridge, Mass. : The Belknap Press of Harvard University Press, 1980) はあるが、活字で読めるものがいまだ出版されておらず、詩人が与えた文脈の下で詩人の残した詩群のテキスト体験を一般の読者のみならず研究者もすることができないでいる。彼女の詩を彼女の用意した文脈で読めないという意味で、この詩人の作品はアンソロジー・ピースーズとしてしか出版されていない。

ファシクル群に基づく『エミリー・ディキンソン詩集』が依然として出版されないのは、ファシクル群は散逸を恐れた詩人が書き溜めてきた膨大な詩群原稿を単に年代順に並べて綴じたものにすぎない、と研究者の大多数が依然として考えているからである。ファシクルすべてが一冊の詩集として出版されていないのはディキンソン研究の大きな障害になっている。これまで1から6まで順に論じてきた私はこう確信するようになった。今後も最後のファシクル40まで詩人の編集の跡を辿っていく計画であるが、このプロジェクトを遂行していくのは、この詩人の「編集したとおりの」『詩集』がディキンソン研究を大きく変えるだろうと私は予感しているからである。40の各ファシクルの編集の軌跡を詳細に一つずつ追跡する執拗さがこの『詩集』の出版を促すことを私は希望する。出版されたこの『詩集』の文脈でディキンソンの詩群を読むのが詩人をもっとも正当に読み込む道だと明らかにしていきたい。(数字について説明する。<sup>1</sup>73 (136) で<sup>1</sup>はファシクル内の順番、73はジョンソン版で割り当てられた番号、(136) はフランクリン版での番号)

私は以下のいわば『エミリー・ディキンソン詩集 6』をこの一ヶ月持ち歩き詩集として読んでみた。以下はその検証の結果である。

<sup>1</sup>73 (136)

Who never lost, are unprepared  
A Coronet to find!

Who never thirsted  
Flagons, and Cooling Tamarind!

Who never climbed the weary league  
Can such a foot explore  
The purple territories  
On Pizarro's shore?

How many Legions overcome  
The Emperor will say?  
How many *Colors* taken  
On Revolution Day?

How many *Bullets* bearest?  
Hast Thou the Royal scar?  
Angels! Write "Promoted"  
On this Soldier's brow!

この詩は冒頭の詩としては、ファシクル5の[1]と比べてなぜ冒頭に来ているのか、冒頭でどのような役割を果たしているのか、が分かりにくい。この詩のいわば「トピック・センテンス」が最後に来る上に、このファシクル全体を見渡したときによやくわかるようになっているからである。その中でも墓の中から「私」が語っている詩群（[1]、[3]、[4]、[5]、[12]、[13]、[14]）とくに[3]と絡めないとかよくわからないようになっている。

第一連はファシクル5の[3]と[18]の余韻の中で語られる。ここに出てくる「人」（兵士であることは最後になってわかる）はファシクル5の[3]に出てくる兵士、血まみれの勝者以上に「勝利」を切実に感じ取っている、敗北して死につつある兵士であろう。第二連、第三連はインカ帝国の征服などの「戦

果」をよしとする大航海時代の王など支配者側からの「華々しい」「基準」を語る。ここにあげられている例はこのファシクルの③の“To fight aloud”（斜体は私の指示）の例なのである。第四連の「私」は第二、第三連の支配者、勝者の「基準」ではなく、第一連の敗者の「基準」を採用して横たわっている一人の名もない兵士をかばった「評価」（「死亡特進」とでも言うべきだろうか）をする。③の言葉を借りて説明すると、“To fight aloud”して華々しい戦果を上げ支配者の期待に応えることはできなかったけれども、彼は名誉の負傷をして倒れた。「災難という騎兵隊」（“the Cavalry of Wo”）と恐怖の中で（“within the bosom”）よく戦ったのだ。

ファシクル6は冒頭から死者が登場する。死者を最終的に「評価」するのは神による最後の審判であろう。しかしながらこの詩ではいつ来るかもしれない「最後の審判」、「復活」を待たずに、死者を「私」が「評価」している。神のすることを「私」が「代行」しているのは（このファシクルで「私」は「死者の評価」の他にも、「生命の注入」（⑭）、「天使の派遣」（③、⑬）、「魂の天国への解放」（③、④、⑬、⑯）をしている）当てもなく確証もなく復活を待っている死者たちが不憫だからだ。

⑦4 ( 137 )

A Lady red amid the Hill

Her annual secret keeps!

A Lady white, within the Field

In placid Lily sleeps!

The tidy Breezes, with their Brooms

Sweep vale and hill and tree!

Prithee, my pretty Housewives!

Who may expected be?

The neighbors do not yet suspect!

The woods exchange a smile!

Orchard, and Buttercup, and Bird

In such a little while!

And yet, how still the Landscape stands!

How nonchalant the Hedge!

As if the “Resurrection”

Were nothing very strange!

最初の二行は丘が毎年の恒例で「紅葉」しているということを言っている。「紅葉」し「落葉」し丘は冬に入ると骸骨のような裸木群で「死」を迎えたようになるが、これはあくまでも自然の恒例の秘密なのだ。多年草のユリは春に咲いて、今は球根になって眠っている。ユリの「眠り」は死の「眠り」とは違って、眠りながら根に着々と春の「復活」のための体力を蓄えている。さびしくなりつつある丘もまもなく果物を身につけ、それを目当てに小鳥がやってくる。目に見えるもので迫りつつある冬の「死」を悼むものは何一つとしてない。自然界では「復活」は当たり前のことなのだ。

ファシクル5の最初に提示された地中に埋もれる球根の再生というテーマはこの詩のユリ根と自然界の「復活」(“resurrection”)に引き継がれ、これが当然視されたことで、今度は地中に埋められた死者たちの「復活」という点にこのファシクルを読む読者の関心は移っていく。この関心にこたえるようにこのファシクルに含まれたのが<sup>12</sup>である。

3126 ( 138 )

To fight aloud, is very brave  
But *gallanter*, I know  
Who charge within the bosom  
The Cavalry of Wo -

Who win, and nations do not see  
Who fall and none observe  
Whose dying eyes, no Country  
Regards with patriot love -

We trust, in plumed procession  
For such, the Angels go  
Rank after Rank, with even feet  
And Uniforms of snow.

人間の存在には悲劇が多いのではないか。次々と襲ってくる災難とそれに付随する悲しみの連続（“The Cavalry of Wo”）に負けずに胸の中でそれに攻撃をかける人こそ派手に戦う人より勇敢だというのである。人間存在のありように絶望して悲しみに打ちひしがれることのないようにすべきだ。人間存在の問題に真っ向から取り組み、人間は認めてくれなくても天使そして神は認めてくれるということか。①を理解するのにこの詩が重要であることはすでに述べたが、この詩は⑬とつなげてもよくわかるのではないか。戦い抜いてたとえ途中で倒れても、その死者は⑬のように墓場の中で目立って、安らかに眠っている人たちに先んじて天使に導かれて天国に上るのではないか。

4127 ( 139 )

'Houses' so the Wise Men tell me  
'Mansions'! Mansions must be warm!  
Mansions cannot let the tears in,  
Mansions must exclude the storm!

'Many Mansions', by 'his Father'  
*I* dont know him; snugly built!  
Could the Children find the way there  
Some, would even trudge tonight!

[3]に続いて「私」の思いは墓の中から天国に行く。賢い人たちのいう天国では、豪壮な家は暖かく、悲しみは入り込めなく、嵐は寄せ付けない。この牢獄のような墓場とは大変な違いだ。子供たちは迷わずにそこに行けるのだろうか。

5128 ( 140 )

Bring me the sunset in a cup  
Reckon the morning's flagons up  
And say how many Dew  
Tell me how far the morning leaps  
Tell me what time the weaver sleeps  
Who spun the breadths of blue!

Write me how many notes there be

In the new Robin's extasy  
Among astonished boughs  
How many trips the Tortoise makes  
How many cups the Bee partakes,  
The Debauchee of Dews!

Also, Who laid the Rainbow's piers,  
Also, Who leads the docile spheres  
By withes of supple blue?  
Whose fingers string the stalactite  
Who counts the wampum of the night  
To see that none is due?

Who built this little Alban House  
And shut the windows down so close  
My spirit cannot see?  
Who'll let me out some gala day  
With implements to fly away,  
Passing Pomposity?

14の中で「私」はいつも「杯」を持ち歩いているとあるが、その杯でワイン（キリストの血であり、10の後半に出てくる永遠の「命」を与えるもの）を死者に飲ませようとしている。

この詩では地上の生命の源である太陽を、どうせ暗闇の中に消えていくのだからか、あるいは地面近く降りてくるので掴みやすいからなのか、命を与えるものとして杯に入れて持ってきて欲しいと地上で生きている人に頼んでいる。

いずれにしてもこのファシクルでは杯は「命」を入れるものであり、杯を



飲むことは再び命を得ることだ。杯は「復活」をもたらす可能性を持つものではないか。「私」は神に頼らずに、自らの工夫で、ちょうど我々がサプリメントを飲むような感覚で、愛するものを「復活」させようとしているのではないか。

墓の中に拘束されて地上の生のあふれる外へ行けない「私」はさまざまなことを依頼せざるを得ない。墓の中からはうかがい知ることの出来ない地上の世界のことをいろいろ訪ねて、最後に尋ねるのは「私」が閉じ込められている墓を作ったのは誰かということと、誰が「私」をこの墓の中、さらに地上の世界から連れ出してくれるのかということだ。この最後の問いは「復活」のことを言っている。死んでいる「私」を甦らせてくれるのは誰かと問うているのである。<sup>14</sup>の最後とこの詩の最後はともにこのファシクルのテーマ「死者の復活」に絡んでいる。<sup>5</sup>の「私」は「復活」を信じきっている死者とは違う。命の「杯」を自ら飲もうとしたり、誰が「私」を復活させてくれるのかを問うて見たりする。

675 ( 141 )

She died at play  
Gambolled away  
Her lease of spotted hours,  
Then sank as gaily as a Turk  
Upon a Couch of flowers

Her ghost strolled softly o'er the hill  
Yesterday, and Today  
Her vestments as the silver fleece  
Her countenance as spray

彼女というのは少女だろう。生のさなか、遊んでいるさいちゅうにこの丘で亡くなったのだが、彼女は死によって墓の中に拘束されない。

7129 ( 142 )

Cocoon above! Cocoon below!  
Stealthy Cocoon, why hide you so  
What all the world suspect?  
An hour, and gay on every tree  
Your secret, perched in extasy  
Defies imprisonment!

An hour in chrysalis to pass  
Then gay above receding grass  
A Butterfly to go!  
A moment to interrogate,  
Then wiser than a “Surrogate,”  
The Universe to know!

ファシクル5の冒頭の詩では球根と繭が生の誕生する源として出てきた。引き続いてこの二つはファシクル6でも役割を果たしている。百合根が養分を再生（復活）に備えて蓄えていることが人間の「復活」を待ち望んでいる、あるいは「復活」の確証を欲している「私」にはうらやましく思えた（[2]）。繭はこの詩では墓とかさなぎと同じく生を拘束するもの（“imprisonment”）になりうるものである。しかし繭やさなぎは生の源として過去になっていくものだ。いったん蝶になってしまうと蝶はさなぎに拘束されることなく自由へと飛翔する。ここが繭やさなぎと墓が違うところである。

876 ( 143 )

Exultation is the going  
Of an inland soul to sea  
Past the Houses  
Past the headlands  
Into deep Eternity

Bred as we, among the mountains,  
Can the sailor understand  
The divine intoxication  
Of the first league out from Land?

二行目の“inland”という語は土の中、墓の中そして「肉体」の中という意味にも取れるであろう。死んで“soul”が拘束するもの（土、墓、肉体）から解放される感覚・喜びを想像した詩である。13の中にも“sails”とか“blue havens”という語が見られる。ファシクル1の1630（6）とか204（3）などに多く見られるように、死んで天国に行くのに「海を船で行く」と表現することがディキンソンには良く見られる。青い空を海に例えているのであろう。

977 ( 144 )

I never hear the word “Escape”  
Without a quicker blood,  
A sudden expectation  
A flying attitude!

I never hear of prisons broad  
By soldiers battered down,  
But I tug childish at my bars  
Only to fail again!

これも墓場の中で死者として「私」が眠っていると想定している。拘束する場としての墓の拘束力で麻痺している死者の気持ちを表現した詩である。

墓の中に入り込んで実際死者たちと横たわって死者の現状を観察してみて、墓でたまらないのはその拘束感である。使者たちはもう生きてはいないが、最後の審判までこのような牢獄の中に閉じ込められるのは死んだ人間にとっても酷なのではないか。また最後の審判でも天国に回されるという保証はない。復活を待ちながら墓の中に安住している人たちもいる。( 14 ) 脱出しようとしても麻痺して動きが取れない人もいる。墓に長いこと安住してきたからである。( 9 ) 「私」は生きている人間のありようを考えている。牢獄としての墓について言えることは、墓が人間の存在の望ましい姿ではないということである。人間存在の基本形は自由であり飛翔である。死による墓場の中への人間の拘束はもっとも非人間的な人間の存在の形だ。物は重力で「地面」にひきつけられ飛ぶことが出来ない。飛ぶということは物でなくなること、あるいは物であることを意識しなくなることだ。物としての人間は墓に閉じ込めうるが、魂は墓から解放しうる。牢獄に似た墓場の中から「復活」を待ちきれず、“soul”、“spirit”、“heart”、“ghost” が海へ( 8 ) 地上へ( 6 ) 天国へ( 3、4、13、16 ) へと脱出する。これらに「私」は死者たちに代わって「飛翔」を委託するのである。

10130 ( 122 )

These are the days when Birds come back

A very few a Bird or two  
To take a backward look.

These are the days when skies resume  
The old old sophistries of June  
A blue and gold mistake.

Oh fraud that cannot cheat the Bee.  
Almost thy plausibility  
Induces my belief,

Till ranks of seeds their witness bear  
And softly thro' the altered air  
Hurries a timid leaf.

Oh sacrament of summer days,  
Oh Last Communion in the Haze  
Permit a child to join

Thy sacred emblems to partake  
Thy consecrated bread to take  
And thine immortal wine!

ファシクル6はファシクル5に必然的に続く詩群であることを随所でディキンソンは示しているが、この詩はファシクル5のもっとも重要な詩20122(104)を引き継いでいる。その詩では「死」のかげりが微塵もない夏の「日」が「生」のエネルギーを味わうように消費しながら、時を進めていくのを詩人は辿っていく。夏という「生」の盛りを生きる喜びが読者に伝わってくる

詩であった。

一見すると秋に死につつある「夏」( 10、 11 ) だが、「命」はがっちりと確保して春には確実に「再生」する。その命にあやかりうとしてキリスト教の儀式を「私」は真似る。「夏の日」がファシクル6のこの詩では「キリスト」なのだ。インディアン・サマー（晩秋の小春日和）を扱ったこの詩の中で、まもなく本格的に始まる冬を前にして夏の日を生命力を「私」は信じている。夏の日死なない。夏は永遠の命であり、秋、冬を越して再び春となって戻ってくる。私はその夏の命を分け与えてもらいたがっている。夏の日がその生の輝きを減少しまもなく訪れる冬の中でそれを完全に失うかに見える中で、毎年経験からそれが生の単なる擬似「喪失」であることを「私」は知っているからである。

11131 ( 123 )

Besides the Autumn poets sing

A few prosaic days

A little this side of the snow

And that side of the Haze

A few incisive mornings

A few Ascetic eves

Gone - Mr Bryant's "Golden Rod"

And Mr. Thomson's "sheaves."

Still, is the bustle in the Brook

Sealed are the spicy valves

Mesmeric fingers softly touch

The eyes of many Elves

Perhaps a squirrel may remain

My sentiments to share

Grant me, Oh Lord, a sunny mind

Thy windy will to bear!

10、11と連続して、冬を生き延びる力を夏の「陽」(生命力)から貰おうとしている。(“a *sunny* mind” という語に注目。)

12216 ( 124 )

Safe in their Alabaster Chambers

Untouched by morning

And untouched by noon

Sleep the meek members of the Resurrection

Rafter of satin,

And Roof of stone.

Light laughs the breeze

In her Castle above them

Babbles the Bee in a stolid Ear,

Pipe the sweet Birds in ignorant cadence

Ah, what sagacity perished here!

2の自然の復活は当たり前のことであり、10、11では偽装「死」である冬を生き延びる力を「生きている」「私」に与えて欲しいと夏の生命力、そして

神に要請している。この流れの中で復活を信じきっている死者たちが墓の中に登場してくる。彼らは復活を信じて安心しきっているように見えるが、死者たちは本当に復活するのだろうか。どうも夏の「復活」が必ず春に起こるようには確実だとは思えないのである。

墓場の中に身をおいて死者たちを眺めていると「復活」を待っている死者たちが哀れに思えてくる。それが春とともに再生する夏のように確実なものではないからである。「私」は安心しきって待っているかに見える死者たちが不憫で、時に神に先んじて彼らを海へ（ 8 ） 地上へ（ 6 ） 天国へ（ 3、4、13、16 ）と救い出そうとする。

1378 ( 125 )

A poor torn heart a tattered heart  
That sat it down to rest  
Nor noticed that the ebbing Day  
Flowed silver to the west  
Nor noticed night did soft descend  
Nor Constellation burn  
Intent upon the vision  
Of latitudes unknown.

The angels happening that way  
This dusty heart espied  
Tenderly took it up from toil  
And carried it to God  
There sandals for the Barefoot  
There gathered from the gales



Do the blue heavens by the hand  
Lead the wandering Sails.

これも墓の中で見た話である。

煩悩の中で倒れたのだろう、苦しみの中でずたずたにされた、引き裂かれた「心」が座っている。天使がそれを見て哀れに思い、苦しみからそれを救い上げ、神のもとに連れて行った。

この「心」は復活を信じて待つどころかいまだに地上のことがらに打ちひしがれている。とてもまだ“meek members of the Resurrection”の一人だとはいえない状態だ。この「心」が「天国」へ連れて行かれたという。この「心」は神のところで「復活」したと言えるのか。これが「復活」なら、「復活」を信じきって墓の中で安心して待っている人たちをどう考えるべきなのか。「復活」は満足して待っているだけではだめだということなのか。

さらにここで考えるべきことがある。この苦しみの中で目立っていた「心」は「たまたま」通りかかった天使が拾い上げてくれた。安らかに眠る者より、苦しむ者は目立って天使に見つけられるから幸いなのか。この詩の例から考えると、この心の「復活」は天使の偶然の慈悲に依存していた。人間の「復活」は自然の「復活」とは違って当てにならないということだろうか。

14132 ( 126 )

I bring an unaccustomed wine  
To lips long parching  
Next to mine,  
And summon them to drink ;

Crackling with fever, they essay,

I turn my brimming eyes away,  
And come next hour to look.

The hands still hug the tardy glass  
The lips I w'd have cooled, alas,  
Are so superfluous Cold

I w'd as soon attempt to warm  
The bosoms where the frost has lain  
Ages beneath the mould

Some other thirsty there may be  
To whom this w'd have pointed me  
Had it remained to speak

And so I always bear the cup  
If, haply, mine may be the drop  
Some pilgrim thirst to slake

If, haply, any say to me  
“Unto the little, unto me,”  
When I at last awake

この詩でも「私」は「死者」の一人であり、いつも誰かの喉の渇きを癒すために杯を持ち歩いている人でもある。しかし杯のワイン（命の素）を隣の死者に飲ませても唇に温かみが戻ってこない。「私」は死者に暖かみ、すなわち「命」の「復活」をもたらそうとする人だけれども、死者に暖かみが戻ったためしがない。最後の行は、「私」の杯を求めて「私」に死者のうちの誰かがす

がってきたら、そのときこそ「私」が「復活」するときだという意味だろうが、このファシクルのテーマ「死者の復活」に絡んでいる。

15133 ( 127 )

As Children bid the Guest “Good night”  
And then reluctant turn  
My flowers raise their pretty lips  
Then put their nightgowns on.

As children caper when they wake  
Merry that it is Morn  
My flowers from a hundred cribs  
Will peep, and prance again.

12、13、14と墓場の中で死者たちを眺めてきた「私」は地上へと読者を導く。重苦しい人間の運命、墓の中の圧倒的な拘束と当てにならない「復活」という問題、に対峙してきた「私」には自然のささいな存在と「生」がいかにいとおしく魅力的に写ったかということである。朝を享受する子供たち、花たちが描かれているが、私の現在の関心にしたがって、ここでは子供たちよりも自然の花に焦点が当たっている。かならず死ぬ人間が従で、かならず復活する花が主だ。過酷な運命に煩わされることのない可憐な花々へのうらやまさが表れている詩である。

1679 ( 128 )

Going to Heaven!  
I don't know when  
Pray do not ask me how!  
Indeed I'm too astonished  
To think of answering you!  
Going to Heaven!  
How dim it sounds!  
And yet it will be done  
As sure as flocks go home at night  
Unto the Shepherd's arm!

Perhaps you're going too!  
Who knows?  
If you sh'd get there first  
Save just a little place for me  
Close to the two I lost  
The smallest "Robe" will fit me  
And just a bit of "Crown"  
When we are going home

I'm glad I don't believe it  
For it w'd stop my breath  
And I'd like to look a little more  
At such a curious Earth!  
I'm glad they did believe it  
Whom I have never found

Since the mighty autumn afternoon

I left them in the ground.

この詩も墓の中からの語りではない。これまで墓とか死者そして天国を語ってきた詩人は地上に戻って、生きている。この詩の中では他の死者たちの「復活」のことではなく、生きている「私」自身のことを考える。「私」もいずれ死ぬことはわかっているが、地下の墓場に拘束されるぐらいなら、天国に行くことを「私」は考える。しかし天国とは死んだときに考えるべきことで生きているときには劇薬になりうる。生きることが嫌になるからだ。天国もよさそうだけれども、この地球も捨てたものではない。まだしばらく天国よりももう少しこの面白い地球を見てみたいと「私」は言う。天国とは死者のためのもので、死者がそれを信じているのは喜ばしいことである。牢獄としての非人間的な墓場から解放されるからだ。

しかしながら地中に下りていくのではなく天国に上っていくことが我々の「復活」ということなのだろうか。死の向こうには確実なものは何も見えない。天国に行くというのは想像力が作り上げた幻想ではないのか。「私」はここで何気なく死んだら天国へ行くと知っているが、「私」が天国へ行けるという確証はあるのか。それは神次第である。それは最後の審判で神が決めることなのだ。このことはこのファシクルのこれまでの墓の中を扱った詩群でいやというほど見せつけられてきたことではないのか。他人はいざ知らず「私」が天国にすぐ行けるというのはまったくわからないことなのだ。

1780 ( 129 )

Our lives are Swiss

So still so Cool

Till some odd afternoon

The Alps neglect their Curtains

And we look farther on!

*Italy* stands the other side!

While like a guard between

The solemn Alps

The siren Alps

Forever intervene!

この詩は墓という観点から “our lives” そしてファシクル6を総括する詩である。

肉体に従属している視覚は物質だけを見る。物質ではないものは目には見えない。そして視覚は見えないものを「想像」することができない。人間の視覚はアルプスを透視して、向こうのイタリアを見「通す」ことはできない。アルプスは私たちの視覚を独占しアルプスの向こうを見えなくしている。アルプスがないことを「想像」して、イタリアを向こうに想像するのは視覚ではなく「想像力」である。第一連で述べられているアルプスが閉め忘れるカーテンというのは視覚ではなく、想像力の次元の問題だ。アルプスの向こうにイタリアがあるというのは視覚では把握できないことだ

天国も同じだということではないか。生きている人間は墓場に気を奪われている。視覚を失い、またそれを補う想像力も欠いた死者は、墓場の中で「復活」を受身で「待つ」だけだ。ときにアルプスというカーテンが消えて、見えてくるイタリアというのはイタリアという単なる一つの国ではなく、天国のことなのではないか。「天国」を称揚するキリスト教の牙城のパチカンがイタリアにはある。

「カーテン」というのは死者が葬られている墓場である。私たちに見えるのは墓場まで、その向こうは見えない。墓場の向こうに天国を見通すことは人間には出来ない。またその墓場は想像力を使わない限り、アルプスと同

じくカーテンをあげることは決してない。このファシクルでは詩人は詩人としての想像力で天国へ使者たちを自由に導いたが、現実では死後の世界は相変わらずまったく見えてこないのである。肉体の死、そしてそれに伴う視覚の死を経験した死者たちの立場に立って、視覚に依存し制限されたがゆえに生きている人間には見えなかったもの、死の見えない向こう側を想像してみようとするが、やはりアルプス・墓は介在を止めることはないということである。

ファシクル6はその短さゆえに、ファシクル5に含まれるべきものという仮説も考えられたが、詳しく読んでみるとファシクル6はファシクル5の独自の必然的な「続き」であり、はっきりとした存在意義を持っている。ファシクル5とのさまざまなつながりで二つの継続性を読者に印象付けようとする編集者ディキンソンのことは本論の中の具体的な詩の中で指摘した。私はたまたまこの二つのファシクルを集中的にこの一月で論考にまとめたのでいっそうこのことを感じる。このファシクルが17編と短いのは秋の短さとか、四季の中での夏の重要性和比べたときの秋の重要性の度合いを示しているのかもしれない。

ファシクル6は舞台をファシクル5の「夏」から「秋」に移している。ファシクル5では冒頭で地中に埋もれる「球根」の「再生」ということが語られた。しかしそれが死んだ人間の「再生」「復活」と絡めて語られることはなかった。

墓の中から死者の一人になってもらもろのことを考える詩群がこのファシクルには多く出てくる。( ①、③、④、⑤、⑫、⑬、⑭ ) 夏の冬における擬似「死」、そして毎春の「復活」劇( ②、⑩、⑪、⑮ )、毎年この確実な四季のパタンをうらやましげに見とれながら、墓の中で死者の立場になっているのを想像している「私」が考えるのは、人間の当てにならない「復活」である。このファシクルのもっとも重要なキーワードは「復活」(“resurrection”)という語で②と⑫で登場するが、⑤、⑩、⑭も「復活」を扱っている。詩人は墓場から「天国」へ想像力で多くの死者を墓から解放するが、墓場と死は

厳然と存在して人間存在に壁を見せ付けるように、「アルプス」( 1 ) のように、聳え立っている。